

緑ネット通信 No.67

緑のネットワーク・まつど

代 表：藤田 隆
 年会費：1000 円
 口座番号：00170-9-696174
 連絡先：高橋盛男 090- 2935- 9444

都市の緑を残すには、緑を見守り育む人のネットワークが不可欠です。私たちの活動の目的は「みどり」、特に樹林の保護・保全を願う人やグループと連携し、その輪を広げ、豊かな生態系を保つ森を次世代に伝えることです。

特集 ステップアップ講座・先行事例視察ツアーを振り返る 第3回 千葉市「市民の森」「市民緑地」指定による樹林の保持

高橋 盛男

2009 年(平成 21 年) 6 月から、松戸里やま応援団の有志により、不定期で開催されてきた「里やまボランティア・ステップアップ講座」。そのプログラムには、緑地保全の先行事例を訪ねるものもありました。それらをふり返るシリーズの第 3 回は千葉市を取り上げます。

千葉市の緑地保全事情、7 年後の再訪

ステップアップ講座で千葉市を訪ねたのは 2013(平成 25)年 8 月。同市職員を講師として、若葉区にある市民緑地を視察したのですが、筆者は都合がつかず参加していません。また、そのときからすでに 7 年近くを経ているので、みどりと花の課に仲介を仰ぎ、改めて同市で都市樹林の保全を担当する公園管理課を訪問しました。

貴重な時間を割いて対応してくださった萩原康弘さんと石橋恵里さんにお礼を申し上げます。なお、同行者は、松戸市緑推進委員の藤田さん、上野さんとみどりと花の課の稲吉さんです。

さて、千葉市では、さまざまな指定制度を用いた緑地保全施策が展開されています。そのうち民有地にかかわるものを以下に挙げます。()内は根拠となる法令です。

- 1.特別緑地保全地区(都市緑地法) 13 カ所 約 61ha
- 2.市民緑地(都市緑地法) 19 カ所 約 20ha(市有地以外)
- 3.市民の森(千葉市要綱) カ所 約 25ha
- 4.保存樹林(千葉市条例) 約 215ha
- 5.里山地区(千葉市要綱) 4 カ所 約 13ha
- 6.谷津田等の保全区域(要綱) 14 カ所 約 59ha
 (5.6.はそれぞれ農政、環境部署の所管)

公園管理課が所管する 1.~4.のなかで、ステップアップ講座のテーマとなっていたのは、市民緑地と市民の森でした。市民の森は、市民緑地よりも早く、都市緑地保全法(現・都市緑地法)ができた 1973(昭和 48)年から指定が始まっています。

同課の萩原さんによれば「市民の森は、開発により減



2013 年に訪ねた若葉区の市民緑地「小倉そよ風の森」
 (現在は市民緑地の指定が解除されています)

り続ける森を守るため、千葉市が独自に設けた制度。その後 2006(平成 18)年、都市緑地法に市民緑地制度ができたので、そちらでの指定に切り替わっていった」とのこと。市民の森も市民緑地も、基本的には所有者との契約により開発を制限する保全策です。

所有者は緑地を市に貸す見返りに、市民緑地ならば税の優遇、市民の森は千葉市の場合、奨励金の給付を受けられます。そして緑地は、共用空間として一般に開放されます。しかし「優遇措置は、所有者が緑地を提供する理由としてそれほど大きいものではなく、地域団体などに緑地の管理作業をしてもらえるメリットのほうが大きいと感じる方が多い」と石橋さんは言います。実はここが千葉市の市民の森・市民緑地制度の見どころです。

指定と管理団体がセットの制度

市民の森と市民緑地を指定する際には、緑地の所有者、千葉市、そして維持管理をする市民ボランティア団体の 3 社で協定が結ばれます。「管理を担う団体があること」が指定の重要な要件。市では維持管理に対応しきれないことがその理由ですが、所有者にすれば指定を受ければ、管理ボランティア団体がセットでついてくるわけです。



園生の森公園を育てる会代表の江田隆正さん。同会では管理作業のほか、自然観察会なども行っている。(今年2月)

「管理団体は、主に町会や自治会、老人会などの地域団体です。市民緑地のほうにはゲートボールクラブや和太鼓の会のような趣味の団体もあります」(石橋さん)

協定で定められた作業は、市民の森の場合はゴミ拾いなどの清掃作業、市民緑地ではこれに外周や園路脇などの草刈り作業が加わります。さらに管理する面積によって、団体には市から報奨金が支払われます。市民の森の場合は1.5ha以上15万円/年、1.5ha未満10万円、市民緑地の場合は、1㎡あたり40円で40万円を上限としています。これが各団体の活動資金となっています。

「市は団体の作業に指示を出したり、活動内容に干渉したりはしません。ほぼお任せです。余力のある団体は、観察会やミニコンサートなどのイベントも行っているようです。また、枯れ木の伐倒など重作業が必要になった場合は、要請を受けて市が行います」(石橋さん)

ベンチや外周柵を自前でつくってしまう団体などもあり、皆さん森の手入れを楽しんでいるようです。

比べて見えてくる松戸に足りないもの

一方、課題もあります。市民の森指定を先行させ、市民緑地の指定を積極的に進めてきた千葉市。ステップアップ講座で訪ねたころは、いわばそのピーク時でした。現在も千葉市には市民緑地を増やす意向はあるようですが「近年はなかなか指定にいたらない」と萩原さん。「理由は、指定を受けてくれる所有者さん、管理をしてくれる団体が見いだせないことです。特に後者の要因が大きい」と言います。

千葉市では、管理活動をする団体への研修などは行っていますが、松戸のような初心者対象の入門講座がなく、地域団体を掘り起こすか、手を挙げてくれる団体を待つかたちなので、管理団体の確保が難しいようです。

また、市民の森や市民緑地は、年限を定めて契約を更新して指定を保持する仕組みであるため、相続などに関係して契約の更新が行われないケースが少なからず出てきているというお話もありました。

さて、ここまで見てきた千葉市のケース、松戸と少し比べてみましょう。

千葉市の市民の森にあたる公開樹林は、松戸にも「常

盤平北口緑地」がありますが、維持管理は市が行っています。市民緑地制度による保全樹林はありませんが、「松戸市緑の条例」による「保全樹林地」「特別保全樹林地」の指定制度があり、指定を受けた樹林地の所有者には、面積に応じた助成金が支払われています。ただし、指定樹林地に松戸里やま応援団などの里やま活動団体が入っているケースがあるものの、多くは維持管理が所有者に委ねられています。千葉市のように維持管理団体とセットで指定するかたちにはなっていませんし、一般に公開利用されてもいません。

一方、松戸市には里やま活動団体が所有者に代わり、維持管理作業を行っている樹林地が20カ所近くありますが、一般に常時公開されているのは公園内の活動地などごくわずかです。また、活動地や活動を担保する制度がほぼないに等しい状態。千葉市の報奨金にあたるものもなく、松戸市の里やま活動団体は個々に資金調達を行っています。ただし、松戸市の場合、里やま活動団体とその活動地は、今後も増えていくものと思われます。

念のために、これは千葉と松戸、どちらが優れ、どちらが劣るという話ではありません。けれども、こうして比べてみると、どちらに何が足りていて、何が足りないのかがおぼろげながら浮かび上がってきます。

例えば近年の都市緑地法の改定では、区市町村で認定が可能なみどり法人制度や、民間事業者により空地の緑化・活用を図る市民緑地認定制度が新設されています。従来のように保全地を地面上で線引きするだけでなく、その担い手や利用の幅を広げることにより、緑地の保全意識を高めていこうという意図がうかがえます。

里やまボランティアが活躍する民有林が多い松戸の場合も、まず望まれるのは活動する樹林と活動を担保する制度づくりでしょう。一方の活動団体は、保全を前提としながらも森の公開度を高めていくなど、より幅広い利用の方策を考える時期に来ているのではないかと。千葉市の事例をうかがいながら、松戸が持つ里やま活動のネットワークがそこに組み合わせさったら、どのような展開になるだろうかといろいろと考えさせられました。



若葉区にある市民緑地「縄文小倉の森」(今年2月)

イベントレポート

ちばの里山 一日体験会
冬の森で遊ぼう

藤田 隆

ちばの里山一日体験会の第 4 回目。1 月 25 日 8:30 に千葉駅 NTT ビル前から出発したバスは長南町役場でマイカー組と合流し親子合わせて 19 人が揃い、長柄町鵜谷（とうや）の竹炭づくりの現場に向かいました。

竹炭作りは「NPO 法人竹もりの里」の現場に円形の無煙炭化器いっぱい竹をくべて燃やし、灰にならないよう頃合いを見計らって水をかけ、鎮火させると竹炭になるとのことで、参加者は竹をくべて焚火を体験しました。できた炭は大小さまざま。プランターなどに撒いておくだけで植物の根張りが違うとの説明に、持てるだけの竹炭をバスに乗せていました。



全体に火が回るまでの間、タケノコ採りを楽しみました。冬の時季にタケノコが取れるとあって大喜び。土を掘り返すとアカガエルが飛び出したり、アマガエルの冬眠の姿、甲虫類の幼虫に出会ったりと驚きの連続でした。

竹炭作りの後は森遊びが待っていました。長南町の一般社団法人「もりびと」のフィールドにバスで移動し「ドングリパチンコ、丸太でコースターを作ろう、スローラインにチャレンジ」の 3 種類の森遊びを楽しみました。

パチンコと的は用意されていましたが、玉がないので、ドングリを拾って玉にし、的に当て、得点を競う大会がはじまりました。優秀賞は高学年女子でした。

ゴムパチンコの傍らでは丸太切りに挑戦していました。ノコギリも丸太を切るのも初めて。やっとの思いで薄く切り取った大きなコースターに親子のニコニコした笑顔が印象的でした。

里山一日体験会では、偶然にも冬眠中のカエルや幼虫に出会い、タケノコも取れました。日頃は体験できない動植物の生きざまに触れたことで、動植物を育む環境としての里山への関心が芽生えることを主催者は期待しています。

アンケートで好評だったのは・竹炭づくりの体験・タ

ケノコ掘り。また「竹林への理解が進んだ」「遊びを通じて自然環境が学べるイベントだ」「千葉の自然、里山活動の理解が深まった」「季節ごとに楽しめるイベントで里山への興味を上げたい」などの意見を頂きました。

里山一日体験会の第 1 回は鹿野山で下草刈りとミツバチ養蜂見学、第 2 回は台風の影響で中止。第 3 回は千葉市谷当町の里山で木の伐採と森林セルフケア体験を行いました。

松戸のみどり再発見ツアー-51

雨の中の八柱散策 11月27日

鈴木 護

5 日間も降ったりやんだりしていた雨が、この日も続きそうな気配だったが、ポツリポツリと参加の方が集合されたので、小雨の中スタートした。

駅からすぐの宮前公園の中央には幹が大きく損傷したケヤキがあるが、雷に打たれたのか焼け焦げてもいる。内部の空洞が見えるほどの状態だが、説明によれば幹の外側が生命線（導管・師管）なので枯死しているわけではないとのこと。樹木の生命力を感じる。「紅葉のシーズン、今日はいろいろな葉っぱを集めておしまいに持ち寄ってみませんか？」と提案されて、さっそくサクラの葉っぱを集めてみることにした。

白髭神社では鳥居に近いところでカヤとサカキを観察、その特徴を教えていただく。本殿の裏には立派なアカガシとスダジイがあり、地面を覆っていたのはシイの実とその帽子（殻斗）だった。

徳蔵院裏手の街路樹のケヤキは強く剪定されたらしく、幹ばかりが目立つ情けない姿で立っていた。しかし樹の上ではケヤキの葉は一枚一枚が 20 センチを超える大きさで、普通のケヤ



どちらもケヤキの葉

キの葉とはかなり違う。これは強い剪定をされて自身の生命のために光合成を急ぐために葉を大きくするのだと言う。その植物の生命のシステムに驚かされる。



徳蔵院は境内に多くの樹木が見られ、ザクロ、カキ、イヌマキ、ハゼなどに混じって説明版も設置されたムクロジを発見。樹下にはムクロジの実もアメ色の丸い姿を見せていたので持ち帰らせていただく。境内の南側は切り立った急斜面で八柱霊園、日暮、河原塚のほうを見るとこの地区の特徴的な地形がなんとなく頭に入る。春木川（下流に行くと国分川と名前が変わる）が造ってきた河岸段丘とのことだった。西方向には富士山が見えるはずだったが、この日はあきらめるしかなかった。

徳蔵院を後にした一行は、さっき眼下に見たばかりの春木川を越えて、石屋さんが多い参道へ。道の両側には大きなケヤキがドッシリとしていてこの参道の独特の雰囲気をつくっているようだ。

そしていよいよ八柱霊園・・・松戸市内にありながら東京都が運営する霊園で都民のみに利用が限られるが、特例で松戸の利用枠も割り当てられているという。著名な方の墓地もあるが、今日は「嘉納治五郎」の墓で説明を聞いた。一昔前はうっそうとした林の部分があったように思うが、近年は園内の整備がすすみ、見栄えのする樹木が多くなっているようだ。今日もサクラ、モミジだけでなくドイツトウヒ、ピンオークといった、とても珍しい樹木に出会うことが出来た。

参加者からも「ピンオークの葉がやぶれかぶれで面白くて、これだけは覚えて帰れそう」と感想を頂いた。また、黄葉、紅葉の仕組みについて知ることが出来た。

おしまいにテーブルの上に色とりどりの葉や松ぼっくりやどんぐりなどの実を広げて、みなさんで紅葉アートを楽しむひとときを持ってから解散した。お墓参りの人影も無い八柱霊園を独り占めし紅葉を楽しみ、植物の不思議な魅力をゆっくり聞くことが出来た雨の中の観察会となった。



総会のお知らせ

日時：5月9日（土）15時～17時
 場所：松戸まちづくり交流室（市役所向かい）
 是非ご出席ください

★松戸のみどり再発見ツアー52(観察学習会 71)

「松戸の秘境・千駄堀～新緑の森を訪ねる」

松戸市の真ん中に、こんなところが?!と驚くような 緑の多い千駄堀地区。

森の中でじっくりと樹木・野草・森の生き物たちと向き合い、身近なみどりを楽しみましょう。

4月22日(水) 9:30~12:30 (小雨実施) 参加費300円 (会員は100円)

集合 新京成線 八柱駅 改札口 9:30 集合 持ち物 飲み物、雨具

問い合わせ 090-2935-9444 (高橋) その他 歩きやすい服装でどうぞ

お願い：新型コロナウイルスのため中止になる場合がございます。事前にご確認を！

～しぜんのコラム 43～

幸せの青い鳥

チルチルとミチルは、クリスマスの前の日に、青い鳥を探しに旅に出かけるが、捕まえて持ち帰ることができない。がっかりして帰ると、家の鳥籠の中に青い羽根を見つける。青い鳥に象徴される幸せは身近なところにあるという話である。

一方、タイガースの「青い鳥」(1968年リリース)は美しい島で見つけた鳥。小さな幸せを手にしたのに、あの空へ飛んで行き、二度と帰って来なかった。はかない初恋のように・・・。

さて、日本で青い鳥といえば、オオルリ、コルリ、カワセミなどがいるけれど、「幸せの青い鳥」というイメージに合うのはルリビタキである。



ルリビタキ(オス) 2020.1.14 千駄堀

ルリビタキは、夏は高山～亜高山帯に生息し、冬になると平地に降りてくる。松戸でも雑木林の縁や森のある公園で見かけることがある。なわばりを持っており、同じ場所に現れることが多い。

比較的人なつつこい鳥で、上の写真は5mくらいの距離で撮影したもの。接近しすぎると飛び去るが、人を誘うように、少し離れた場所にとまり、幸せな気持ちにさせてくれる。

なお、青い色をしているのは成熟したオスだけで、メスの体の上面はオリーブ褐色。未熟なオスもメスに似ているが、尾だけ青い。

(山田純稔)